
猫守 -ネコガミ-

T・K・Westfence

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

猫守 - ネコガミ -

【Nコード】

N4566H

【作者名】

T・K・Westfence

【あらすじ】

《こんなことが、現実にあっているのか？俺の頭がおかしくなってしまったのか？夢なのか？…いや、違うだろう。だが、それならばこの状況はいつたい何なのだろうか。……俺は猫と話せるようになっていた。…》猫と話せるようになった少年、姫神カグヤと、愉快な(?)猫達の物語。

プロローグ（前書き）

何もかもがつまらない。もう、なににもする気が起きない。
…無駄だから。

プロローグ

「カグヤ。誕生日おめでとう。」

「…良く覚えてたな。」

俺は姫神カグヤ。中学１年生。

ちなみに今話しかけて来たのは同級生のリュウ。こいつの名字はもう覚えていない。

…そして、ここまで読めばわかるだろうが、今日は俺の誕生日だ。まあ、自分でも覚えていなかった。１３才になったから何だと言うのだ。

別に俺は花火から神社の御神体をまもったりしてないし、変なじいじに『１３才になったら不思議な力が…（うる覚え）』とか言われていない。

十三才で何か変わることと言えば…自転車で普通は車道を通らなければなくなるとか、…ある行為を同年齢の女子としても犯罪じゃなくなる（補導されるが）ぐらいだ。それに、後者にいたってはこちらは何の関係もないし、する気もない。俺の誕生日関係ないし。

…まあ、それはどこかに置いておくとして、要するに、誕生日はどうでも言いと言う話だ。どうせ誰も祝ってくれない。

「オレは？」

ええい、勝手に思考を読むな。で、こいつは勘定に入れないとしても、『家族はどうなんだ？』と思う奴もいるだろう。

家族はいない。母と妹は幼い頃に事故で死んだ。その時のことは鮮明に覚えている。

それは七年前の事だった。父の運転する車に乗って出かけていたとき、隣の車線（高速道路だった）から飲酒運転の車がつつこんで来て…それにぶつかられて、左側の壁につつこんだ。車は大破し、左側の座席に座っていた母と妹は即死だった。

俺はひたすら泣き、親父も母の遺体にとりすがって泣き叫び、自分は死んでもいいから二人を返せとわめき、それから酔っ払いにつかつかった。他にも色々、無駄なようなことまで覚えている。例えば、あのときはなぜか周りにネコが多かった気がする。

そして、その時から、親父は変わってしまった。前は朗らかな奴（息子から見ても）だったのに、始終ふさぎこんでるようになった。さらに、出張が多くてなかなか家にいない。今も出張中だ。

そんなわけで、俺は孤独だった。

そして、人生がつまらなかった。

何もかもがつまらない。もう、なにもする気が起きない。…無駄だから。

どうせ最後は死ぬ。死は突然やってくる。ならば、何をやっても無駄ではないのか。

また、中学というつまらない時期がいやだった。早く卒業して、働けるようになって、自由になりたかった。バカな世界から出たかった。自分の力で生きていきたいかった。

大人はよく、『中学のときは楽しかった。』というが、まったく楽しくない。

同級生も、皆バカに思えた。くだらない、どうでもいいことを言っただけは耳障りな声で笑い、軽い気持ちで人を傷つけ、ふざける。人生そのものをふざけている。ふざけた人生しか送れないだろう。

なんて考えつつ、『普通の』生活を送っていた。

プロローグ（後書き）

前作終わらない内に始めちゃいました。
しばらくは不定期更新です。

第一話：血筋（前書き）

こんなことが、現実にあっているのか？

俺の頭がおかしくなってしまったのか？

夢なのか？ … いや、違うだろう。

だが、それならばこの状況はいつたい何なのだろうか。

……俺は猫と話せるようになっていた……

第一話：血筋

もう、学校にすら行きたくなくなつて来た。

「…まったく、困つた奴だ。」

何だ？今の声は。この部屋には俺と、…空いている窓にネコが一匹。その猫もしゃべれるはずがない。

まあ、どっかのマンガのしゃべるネコに似てはいるが。

もちろん、もはや生きた化石な、『窓から入ってくる幼なじみ』もいやしない。いてほしいが。そして色々あつたら面白いんだが。その時だった。普段鳴くような口の動きで、そのネコはしゃべつたのだ。

「学校は嫌いなのか？」
と。

「な．．．お前人間の言葉を…？」

「俺がヒトの言葉を話せるのではなく、お前がネコ語をわかるようになったのだ。」

「マジか？」

「えらくマジです。」

「うゝん、パロディ調が拭えないな。」

「ちよつと待ってる。」

と言うなり、そいつは窓の外へ消えた。

「おい！！」

思わず窓から身を乗り出す。

…それがいけなかった。

窓の外は何もなく、この部屋は二階だ。それをすっかり忘れていた。身を乗り出しすぎて、頭から俺は落ちていった。

目を空ける。ケガは、…していない。背中の下には、柔らかい毛。ネコが密集して、クッションになっていた。

…ありえない。ネコがこんなにまとまった動きをするなど。

…そして、俺は見た。『それ』を。そこには、他のネコの数倍はあるつかというネコがいた。ネコの長とでも言うべきだろうか。

そしてそいつも話し出した。（多分ネコ語で）

「はじめまして．．．になるのかな？カグヤ君。」

「…誰だお前。そしてなぜ俺の名を知っている？」

「わしは1000年生きたネコの妖怪、『猫又』。危ないところだったな。『猫守』の末裔よ。」

「守り手？」

「そうだ。…お前の家は、昔は『猫神』^{ねこがみ}という家だった。それが明治の頃に姫神と名字を変えたのだ。」

「…」

「猫神の一族の長男は、16才になるとネコ語がわかるようになる。そのほかにも様々な能力を得ていく。」

「じゃあ、…親父も？」

「ああ。そして、能力を持った者を一族では『猫守』と呼び、猫守はネコを守る義務がある。そして、ネコは代わりに猫守を助ける。」

「つまり、俺は『猫守』で、おまえらを守るわけか。」

「そのとおりだ。」

すごい血筋だったんだなあ。あのハゲにもそんな能力が．．．

「あれ？夏彦（親父の名）ってハゲてたっけ。」

「さらっと思考を読むな。親父は髪生えてるけどなんかアレ、イメージ？」

「…まあいい。一つ忠告がある。『猫守』であることは出来るだけ人に知られないようにしろ。能力を悪用しようとする奴もいる。」

「…わかった。…だから名字を変えたのか？」

「そのとおりだ。」

「…ちよつと待て。疑問が山ほどあるんだが。」

「悪いな。ここには長くいられんのだ。詳しくはあすこにいる…そうだな、『レオ』がお前をこれから助けていく。」

「そうかい。」

しかし『レオ』って．．．大した名前だな。

想像も出来ないようなことが起こったのに、意外と平然としていられた。．．まあ、日常が少しは面白くなるだろう。

「最後に一つ聞いていいか？」

「何だ？」

「江戸時代は、士農工商のどれだったんだ？」

「鎌倉時代は武士の血を引いていたんだが、だんだん身分が下がって、江戸時代には『穢多^{えた}』だ。」

聞かなきゃ良かった。

第二話：歴史（前書き）

「化け猫ながら、あなたに惚れてしまったんですよ。まだ、私と結婚したいと思えますか？」

第二話：歴史

時は1200年、猫又180才。

生まれたときは普通の猫だったが、100年以上生きたことで神通力を得て、人の姿になるなどの能力を持った。そして．．人に恋をした。

相手は武士の娘。猫又（当時はミケと呼ばれていたので以下ミケ）がよく出入りしていた横山という武士の家の娘で、

よくミケをひざにのせてなでたり、汚れていたらたらいで洗ったりしていた。

．．そして、ある日。ミケは決意した。人の姿をして、その娘を訪ねた。そして、段々と親しくなっていた。

ミケが猫の姿のとき、寿子（その娘の名）はこんなことを言った。「あのねミケ。私、もうすぐ結婚するかもしれないの。私を好きなように見える人がいてね、私もその人を好きだから。」

それは、ミケが猫であったから言えたのだろう。

しかし、当然だが、どうしてもミケと薬師やくし与一学徳いちがくのり（ミケが人の姿の時の名）は顔をあわせることはない。

あるとき、寿子こじこは言った。

「あなたに会わせたい猫がいるんです。よくこの家に来る三毛猫なんだけど、オスらしいの。珍しいんですって。」

これは、何と答えるべきだろうか。

「あ、もしかして猫は嫌い？」

そんなわけないだろう。猫なんだから。まあ、猫より好きな人間はいるが。

「いえ、その猫を知っていると思っただけです。」

「あら、そうなの。」

その一言の間に決心がついた。

「ちよつと見ていていただきたい。」

そして、寿子の前で猫の姿になった。

「……」

何も言えなくなっているようだ。

「私がミケです。」

人の姿に戻って言った。

「……」

「化け猫ながら、あなたに惚れてしまったんですよ。まだ、私と結婚したいと思えますか？」

…墓穴を掘っている。寿子は猫と結婚しようなどとは思わないだろう。

「…ええ。」

なに？

「あなたが猫だとしても、私はあなたが好きです。結婚も、…あなたが望むなら。」

そして、より関係は親密になり、学徳たかのり（ミケが人の姿の時の名）は横山に頭を下げ倒して、二人は結婚した。

その第一子（男）の幼名は隼人はやと。やがて猫神家初代当主、猫神太郎ねこがみたろう泰幸となる。

「…って感じで猫神家は出来た。」

「つつこみ所満載だな。」

「そうか？」

「ああ！まず、『長くいられない』とか言っただくせに、なんで長話してんだ？」

「ああ、あれはあの場所だと人目につくからという意味で…。」

「おいおい…あと、俺はお前の子孫なのか？」

「そうだ。」

「かんべんしてくれよ。あと、物理的に人間と猫の間に子供ってできるのか？」

「化け猫だから。」

「ラスト。お前染色体異常？」
「…たぶんな。」

第三話・従兄妹（前編）（前書き）

「このクラスの姫神カグヤの従妹の、姫神涼子です。よろしく願
いします。」
マジかよ。

第三話：従兄妹（前編）

「カグヤっ!!」

いきなりふとんをはがされた。何なんだ？ 女の声に聞こえたが。この家には女はいないはずだ。

目をあけると…そこには俺と同年代のように見える少女がいた。

「誰？」

…そいつの話を要約するとこんな感じだ。

親父は猫神（姫神）家の直系の血筋（その親父の長男たる俺も）だが、その親父には弟がいた。

その弟が、25才にして化け猫になった28才の化け猫と結婚し、猫神本家（俺と親父）と同等の力を持つ分家が出来たのだという。そして親父の弟（叔父）の娘がこいつなんだそうだ。つまり従兄妹いとこだ。ちなみに、同じ年で、こいつも能力を持っているという。

何か納得できないものがあるが、まあいいだろう。

「で、その従兄妹が、なぜここにいるんだ？」

「猫又のおじいさまに頼まれて。カグヤの世話をしてくれて。」

「レオは？」

「いや、身の回りの世話は女がいいだろうと。」

「まさか俺の学校に転校してきたりしないだろうな。」

「もちろんそのつもりだけど？」

「つか、なんでそんなめんどくさそうな、まあ自分でいうのも何だが、そんな役をしにこんな所まで来たんだ？」

「猫又のおじいさまにはさからえないもん。あの人に敬意払わないのはカグヤだけよ。」

マジかよ。

まあ、いいか。

「ところで、お前の名前は？」

「姫神涼子。」

「そうか。よろしく。」

ちなみに、けっこうかわいい。あ、まあ従兄妹だから、法律上結婚できるのだが、決してそんなつもりはない。

ちゃんとクラスに好きな娘もいるしな。

あ、お前今以外だと思っただろう。ちゃんといるからな。

そして、教室。

「おーし、HRホームルーム始めるぞ。」

担任が入って来て・・・その後ろに涼子がいた。

「いいか、いつも言っているが、人間と言う言葉は、人の間、つまり人と人の関係を表している。人は一人では生きていけないんだ。」
また始まった。

「...ってわけで、今度から君達の『仲間』になる、...」

涼子に続きをうながす。

「このクラスの姫神カグヤの従妹の、姫神涼子です。よろしく願います。」

ざわめきが起こる。『あんな可愛い娘がああ姫神の親戚?』とか、『同居してんのかな』とか聞こえる。

「はいはいみんな静かに」。じゃあ、席は・・・」

「カグヤの隣って空席ですよね?」(涼子)

確かに俺の席は窓際の最後尾で、となり(女子列)は空席である。

「そうだな。じゃあそこにしよう。」

じつとりとした視線を感じる。この後うるさいだろうなあ。

第四話・従兄妹（後編）（前書き）

目を覚ますと、目の前に涼子の顔があつた！？

第四話：従兄妹（後編）

「どっから来たの？」

「誕生日は？」

「血液型は？」

「ほんとにカグヤの親戚？」

とか、どうしてもよさげな質問の後に、恐れていたことが起きてしまった。

「どこに住んでんの？」

逃げよう。

気付かれないよう懸命に教室のそとに逃げようとしたが、時すでに遅し。

「カグヤと！？」

言ってしまったようだ。おそろおそろ振り向くと、すごい量の視線と殺気が……

その後、二人がかりで言い訳：もとい説明をし、全員が（形だけでも）納得したのは、四十分後の事だった。

さて、涼子がいても家事が楽になったとかそのくらいで、たいして生活に影響はない。

で、まあ、普段通りメシ（涼子作った。悔しいが俺の数十倍うまい）を食って風呂入ってまあ寝ようかというとき。

涼子がいつのまにかいなくなっている事に気付いた。

でも俺もバカじゃないから、三秒で結論は出た。風呂にでも入ってるんだろう。

俺は結構、弁当とか自分で作らなきゃいけなかった関係で早寝早起きの健康的な生活を送っていたから、もう寝ることにした。

途中でトラ猫がふとんに潜り込んで来た。よくあることだ。

翌朝。

目を覚ますと、目の前に涼子の顔があった!?

しかも全裸。

とりあえずそつと逃げようとする、どうやら起こしてしまったよう、で、むくつと起き上がった。

「おふあよ。」

うわ超寝ぼけてる。そして、全裸なわけで、起き上がったら当然・

あわてて飛び退いて顔をそむけ…ようとした。誰が何と言おうと顔をそむけようとした。

しかし、ちょうど涼子が俺の肩に手を置き……

二人揃って転がり落ちた。

しかも俺が下だから逃げられない。いやでも涼子の体が目に入り、自然に体も反応する。

そして、そのタイミングでドアが開き、…親父が入って来た。

ちよつと固まって、ゆっくりとドアを閉めた。

…これ完全に誤解された。

「おい待て親父ー!!ちがうんだこれはー!!」

おれの懸命な叫びに反応したように再びドアが細く開き…話に聞く0.05mmのラテックス(多分)がドアのすきまからいくつか入って来た。

「だから違うー!!!」

涼子は猫神の能力の一つとして、夜(八時半ぐらいから朝五時ぐらいまで)は猫の姿になるらしい。そして俺に対してはあまり警戒心も羞恥心もないらしい。困ったものだ。親父によると幼い頃結構仲良くて、一緒に風呂入ったり寝たり(普通の意味で)してたらしいから、それが原因だろう。しかし、その頃のこととは覚えていたかつたかもしれない。あ、俺にロリコン的趣味はない。

親父に説明していて学校に二人揃って遅刻し、クラスメイトの大

部分に質問攻めにされ、まさか本当のことを言うわけにいかない（また誤解されまくる）から言い訳にかなり苦労したことは言うまでもない。

あと、涼子の能力は涼子の母親（化け猫）から来たらしいから、今のところその能力を持つのは涼子だけだそうだ。

第五話：能力（ちから）（前書き）

「猫守の能力は、『時』がくれば自然に現れます。」

第五話：能力（ちから）

さて、実は俺は、13歳になって得た能力ちからのことをほとんど知らない。むしろ能力の存在を忘れていた。だが、涼子の件で思い出したわけだ。

…ということで、レオを呼び出して聞いてみた。

「お呼びでしょうかがグヤ様。」

「様つけなくていいって初登場で俺の相談役のレオ。」

「説明的ですね。」

「しょうがないだろお前一話で名前出ただけなんだから。」

「…で、何ですか？」

「いや、俺の能力って具体的にどんなの？」

「……」

「どうした？」

「いえ、私感動致しました！！」

「はあ！？」

「カグヤ様が自分から能力のことを知りたがるとは！！これで天国の夏彦さまも…」

「失礼だなオイ。あと親父死んでないし。」

あ、夏彦って俺の親父の名だ。ちなみに冬生まれ。

「…で、俺の能力ってどんなの？」

「猫守の能力は、『時』がくれば自然に現れます。」

「どういうことだ？」

「必要に応じて能力が目覚めていくのです。そして、『付き人』、つまり私は、能力が現れればそれに気付き、猫守に知らせると言う役割があります。ちなみに、今あなたは基本の猫語理解や身体能力の他に『変身トランスフォーム』の能力があります。」

「トランスフォーム？」

「ええ。涼子さまのように猫の姿になる能力です。あなたの場合任

意でやるもののみです。」

「へえー。」

この『変身』がこんなに早く使われることになるとは…

「…夢にも思わなかったぞ！」

今俺とレオは必死で走っている。ついさっき出た能力、『インジビリティ姿隠』を使っているので、俺とレオの姿は俺たち以外には見えない。

「遅いなレオ！」

「いや、これが限界です。…猫とチーターでどんだけ脚力違うと思ってるんですか。」

そう、俺の『変身』した姿は、なぜかチーターだ。人によって様々な変身をして、ネコ科のライオンやチーターになることもあるらしい。

目的地に着いた俺たちはかなりの急ブレーキで止まり、俺はインジビリティはかけたまま人の姿に戻った。

警戒しつつ中に入る。そしてそこにいた涼子に、持ってきていた袋を渡した。

「まったく、何で俺がお前のために長野まで行って水晶とってこなきゃならんだ。」

「ほら、半分はカグヤの分でいいから。」

実に平和な、ある暑い日の事であった。

第六話・はじまり（前書き）

ごく普通の、季節外れに暑い日だった。

第六話：はじまり

.....

.....

.....

「……やっぱつまんねえ。」

「まあそう言わず……」

説明しよう。今は学校にいる。そして……

「ところで、何でお前がここにいるんだ？レオ。何か用か？」

「いえ、ちょっと心配で……」

「何がだよ？」

「カグヤさまの成績……いて。殴らないで。」

「帰れ。」

「えゝ？……でも、実際心配なんですよ。」

「俺の頭がそんなに悪いとでも？」

以外かもしれないが、俺は成績は結構いい。手を抜いてる体育以外。

「いえ、冗談抜きでカグヤ様の安全が心配なんですよ。」

「進級の？」

「いいかげんそこから離れましょうよ……（^ ^ ;）」

「何だ、ここで俺の身に危険が迫るとでも？」

「まさにその通りです。」

「Why?なぜ。」

「あなたは次期当主、いや実質当主です。」

「……そういうことか。」

「そろそろ来そうな気がするんですよ。」

レオの予感には当たってしまった。

……そう、全てのはじまりは、この翌日だった。

ゆっくりと空を見上げる。

人の手で模倣するのは不可能に近そうな、澄みきった深い青。

そして、白い、『絵の具を流したような』というのはこんなだろうと思えるような、でも絵の具よりずっと輝く雲。

この空の下に、親父や涼子といった仲間もいれば、レオのいう敵もいるのだ。そんな事を思いつつ、空を眺めていた。

ごく普通の、季節外れに暑い日だった。

第六話・はじまり（後書き）

作者は空マニア（？）です。

第七話：襲来（前書き）

なにか変なことが起きてしまった。

第七話：襲来

窓から差し込む日の光で、俺は珍しくすんなりと目が覚めた。

時計を見る。六時三十五分。部屋は何の音もしない。しかし、何か変だ。能力を得てから敏感になった俺の五感+αがそう告げている。何なんだ。何も変わったことは……ん？ 『何の音もしない』？ そうだ、それだ。

この時間になれば、日の光とともに起きた小鳥が鳴いているはずだ。それに、この部屋の時計は結構音をたてて動く。

なにか変なことが起きてしまったようだ。

とりあえず服を着がえて部屋を出る。たしか親父はまた出張だ。ちなみに、涼子が来てから親父は結構明るくなった。「オジさんと結婚しないか」とか「風呂一緒に入ろうよ」とか、かなりセクハラぎみな発言を（涼子に）よくしてる。あれじゃただのエロオヤジだ。…そして、涼子の部屋は鍵がかかっていた。まあ当然か。レオに至っては所在不明。さてどうしたものか。

よし、外に出てみよう。決定。

さて、外に出てみたはいいものの、やはりおかしい。朝六時台なら普通結構人はいる。今はまったく見当たらない。何なんだ。……いや、いた。80mほど離れたところに、ぼつんと立っている人がいる。何やってるんだあなところで。ゆっくりと近付いてみる。

「……っ？」

思わず息を飲む。自分じゃわからないが、多分相当顔が引きつってる。…その人は、おそらく新聞配達なんだろう。新聞を投函しようとしたところで、完全に止まっている。

何が起こってるんだ。

そして、そばの道路で、俺はさらに顔が引きつる事になった。

これが写真だったら違和感はない。しかし、現実には…おかしい。信号は動かない。車も全てが完全に停止している。中に乗っている人も。そして…スズメなどの鳥でさえも、空中で羽ばたきかけつつ止まっている。

どうやら時間が止められているらしい。何者かによって。

その瞬間、なにか言語では説明できない感覚が生じ、後ろを振り向いた。そして、飛んで来た物をギリギリでよけた。

飛んで来た何かは、…爪だった。

っ左だ！そんな声が聞こえた、…気がした。俺の心の声か、第六感の知らせだったのかもしれない。

とりあえず、左から飛んで来たものを避け、そのままそれが飛んで来たと思われる方向に飛んだ。能力の関係でかなり身体能力も上がっている。体育の時間とか隠すのが大変だ。…そして、そのままそこにいた人影に飛びかかり、組みふせた。

「おーし捕まえ……って親父？」
何？

「出張じゃなかったのか？」

「出張と偽ってあなたの元服の準備をしていたのですよ。」

「何でお前までここにいるんだ？レオ。そしてなんだ元服って。」

「昔の成人式です。猫神家は能力を得れば成人なので。」

「もうちょい詳しく説明しろ。」

あいつらの話をまとめるとこんな感じだ。猫神家は能力を得た時点で成人とし、その一ヶ月後に『試練』を行うらしい。猫又のジジイの能力で時を止め、その時の当主（つまり今は親父）が攻撃を加

えて対応を見るらしい。何の役に立つのかさっぱり分からん。

涼子も試練を受けてなんとか切りぬけたらしい。親父の姿を見ることも出来なかったらしいが。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4566h/>

猫守 -ネコガミ-

2010年10月9日11時36分発行